教職課程センター紀要　第４号　150-152 ページ、2019 年 12 月
Jour. Center Teacher Develop. Edu. Res., Daito Bunka Univ., No.4 150-152, 2019

イングランドにおける新自由主義教育改革と日本への示唆
～クルツ博士の講演に寄せて～

The accumulative effect of neoliberal education reform in England and its implications for Japan

仲田康一
Koichi Nakata

はじめに

先に掲載されたクリスティ・クルツ博士による講演記録は、2018 年 11 月 30 日、教職課程センター主催の「教員養成コロキアム」における同氏の講演のスクリプトを翻訳したものである。通算第 5 回となるこの研究学習集会では、「イギリスの教育・イギリスの教師～新自由主義改革は教育をどう変えたか？～」という題名のもと、学内外の学生・院生・教職員等、計 59 名が参加し、議論を深めた。そのメインゲストとして講演を行ったのが、ケンブリッジ大学教育学部リーヴァーヒュームトラスト若手研究員のクリスティ・クルツ博士である。

本稿は、クルツ博士の講演を解題しながら、その日本への含意について若干の考察を行うものである。

クルツ博士は、ロンドン大学ゴールドスミスカレッジで社会学の博士号を取得した新進気鋭の研究者である。この博士論文は 2014 年に英国教育学会優秀博士論文賞を受賞した。それを 2017 年に単著にしたのが *Factories for Learning: Making Race, Class Inequality in the Neoliberal Academy* (Manchester University Press)という研究書である。筆者（仲田康一）が英国の学校制度改革の研究を行う中でクルツ博士と知己を得、研究交流の一環として来日の運びとなった。

イングランドの教育改革とアカデミー

英国は、民族的にも階級的にも多様性に満ちた国である。民族や階級は子どもの学力に強い影響を与えていることの自覚の上に、いかに社会的に格差のない教育を提供するかが戦後の課題であった。

これに対して、1980 年代のサッチャー政権以降、学力テストによる評価と、市場原理に特徴付けられる新自由主義的な教育改革が一貫して進められた。否応なく勝ち負けを決めるテスト体制は、何らかの理由で学力の低い学校に失敗校のレッテルを貼った。入学者数の減少に伴う予算削減で多くの学校が負のスパイラルに入り込んだ。凋落が最も激しかったのが、人種的・階級的に多様で、投資を拒まれ続けてきたインナーシティの学校であった。

インナーシティの学校の凋落に対して、新労働党政権が導入したのが、アカデミーという新しいタイプの学校制度である。アカデミーとは、「中央政府が資金を拠出し、しかも民間団体による独立運営が認められた公立学校」である（仲田，2016：100）。地方当局の統制から独立し、独自の入学指針、授業日数が認められ、教職員の労働条件も国と教員組合の交渉に縛られない。教育課程についてもナショナル・カリキュラムに縛られない。こうした自由がイノベーションを起こし、公的部門によっては不可能であった教育問題の解決が可能になるというのが触れ込みであった。逆に言えば、成績が上がりさえすれば、民間団体が公費を使って学校を独立運営することも可能になるという民営化や規則緩和の典型例がアカデミー政策であるともいえる。

ブレア政権下で中等教育を対象に導入されたアカデミー政策は、政権交代以後も推進され、2010 年のアカデミ

一法により、貧困地域の中等学校に限定されていた導入の制約が解除された。2019年1月の段階では初等学校5,180校(30.9%)、中等学校2,315校(67.1%)にまで拡大している(DfE, 2019)。

クルツ博士の研究対象であるドリームフィールズ校は、階級的にも人種的にも複雑なインナーシティの学校であるが、突出した試験の成績や大学進学実績で知られている。政治家や政府関係者の視察も相次ぐ同校は、一連の新自由主義教育改革の成功を裏付ける「エビデンス」と目されてきた。その学校の内面で何が起こっているのか。18ヶ月に渡る濃密な参与観察をもとに描き出すのがクルツ博士の研究である。

強圧的な管理教育による学力テスト結果の造成

明らかにされているのは、その学校が、強力な生徒指導によって厳格な規律を学校内に行き渡らせ、まるでパノプティコンのような管理体制を構築していることである。一日3回の定時整列、怒鳴り声による管理、休み時間における6人以上の生徒集団の強制解散、規則違反の累積者に対する別室指導、詳細な制服や頭髪規則が典型例である。教師はこうした極端ともいうべき指導を足並み揃えて実施しなければならず、持ち場を守らない教師がいれば、たちどころにiPadで役割を担うよう全員メールが送られる。教育活動においては、学力テスト対策になるかどうかが大きな判断基準であり、定期的になされる試験結果に沿って、テスト結果の改善にどれだけの貢献をしたかが教師の評価にもつながっている。時間・空間・身体に対する物理的・精神的な管理を通して作られた機動的で凝集的な学校組織が、学力テスト結果につながるというのである。クルツ博士は、こうした方法を肯定しているわけではない。彼女は、講演の中で、「勉強に集中させるため」という名目のもと、生徒が廊下で会話することを禁じたことで「監獄のようだ」という批判を呼んだ別の学校の例(Perraudin, 2018)を取り上げながら、学習規律の徹底の名において学校の非人間化がイングランドにおいて進んでいることを批判的に論じている。

人種・階級をめぐる差別の複雑性とその再生産

しかし、この規律の徹底は、単に非人間的であるということを超えた、より大きな社会的含意を持っているというのがクルツ博士の研究の眼目である。クルツ博士が明らかにしているのは、階級や人種によって、学校や教師の生徒への対応が異なるという問題である。

人種や階級は、非常に複雑な相互性を持ちながら、独特の意味を構築している。クルツ博士は、生徒への眼差しは、「黒人か白人か、中流階級か労働者階級か、というような単純な二項対立ではなく、極めて多様化した空間の中に広がり維持されている人種的・階級的な合成物」(p.146)だという。

その典型が、「白人らしさ whiteness」・「黒人らしさ blackness」という概念である。前者は、学校にとって高い学力と、適切な性向を持つ「正統文化」を予測させるものである一方、後者は学校を取り巻くインナーシティの「問題」に接続する。教師は、黒人の（特に男子）ほど、その逸脱を拡大解釈し、同じ行為でありながら、白人生徒より黒人生徒の方が懲戒の対象になっているという。他方、白人中産階級生徒の逸脱は、問題が過小評価される。というのも、学校にとって、白人中産階級の生徒は、学力テスト成績において貢献度の高い、学校にとっての「資産」だからである。こうしたダブル・スタンダードは、肌の色によって規定される部分が大きい。

だが、「らしさ」という言葉が示すように、実際の肌の色が全てを決定しているわけでもない。白人でありながら労働者階級であったり、労働者階級的な振る舞いや言葉遣いをしたりする「チャヴ」へのヘイトに象徴されるように、「不潔な白人らしさ」という差別も存在する。他方、ジョシュアやアイザックの例のように黒人であっても「白人らしい」振る舞いを獲得することで一定の「正統性」を手にする者もいる。

重要なのは、こうした正統性の獲得競争の中で、結果的に白人中流階級「らしさ」のヘゲモニーは手つかずのまま維持されているということである。ドリームフィールズ校の生徒観は特定の価値観に基づいている。話し方、服装、身振り等の点で理想化されるのは、白人中産階級の、特に、エリートビジネスパーソンらしさであるとクルツ博士は述べる。ドリームフィールズ校は、資本主義の競争社会の中での「勝ち組」の姿としてこれを提示し、「よい人生」という幻想によって、忍従を求めている。だが、それは特定の人種・特定の階級の特質を持つ理想像であるがゆえ、ある生徒にとっては馴染み深く、別の生徒にとっては内面化が難しいものになっている。

体制の内面化と排除：新自由主義的主体の創出

興味深いのは、非熟練労働の就職先があり、反学校の文化が維持されていた『ハマータウンの野郎ども』の時代と異なり、将来不安にあえぐ子どもたちは、違和感や不満がありながらも、同校の体制を受け入れていることである。高い学力や優れた進学実績は、子どもたちをこ

の学校につなぎとめる強力な要因となっている。

教師も同様である。強圧的な規律について、「授業がしやすい」と感じる教師は、それを受け入れ、時には歓迎さえしている。悪い評価を受けたくないという恐れに駆動されて、時間外労働が常習化しているが、教師たちは同校の高学力を誇らしく感じてもいる。こうして、人々は、競争と自己責任を内面化した新自由主義的主体として造り上げられていく。

逆に「協調し、成果をあげよ。さもなければ辞めろ」という言葉が象徴的であるが、体制になじまない教師は排除される。生徒の排除についても言及があった。講演では、ラーニング・サポート・ユニットという名の小さな窓しかないプレハブ小屋が投射された。問題行動を行ったとされる生徒は、ここで別室指導を受けるのだが、極端な場合は、そのために授業が受けられず、ますます学校にいづらくなっていく。学校にとって「手間のかかる」生徒には意図的に生徒に厳しく当たり、退学を促す戦術についても言及があった。原著では、「間引き weeding out」という表現でこれが示されている。

そして、間引かれて空いた場所に新たに入学してくるのが、ドリームフィールズ校の評判を聞きつけてきた他地域の白人中産階級の生徒である。途中からの転入生徒は年々増えており、それが優れた進学実績を生み出している。これは、ドリームフィールズ校が困難集中地域の学校で成功したからといって、格差を縮めたわけでは必ずしもないことを意味している。

おわりに：日本の教育への示唆

クルツ博士の研究事例校は、日本の学校を思わせる要素を多数有している。学校の価値を語る上で学力テスト成績の持つ比重をいびつなまでに大きくしてきていることは、全国学力調査結果に追われる日本の学校を思い起こさせる。管理教育の状況についても、学習規律の過剰な強調により学校の自由度が下がっている日本の学校と相同的である。

こうした相同性を踏まえたとき、日本にいかなる示唆があるだろうか。ありうる含意は多岐にわたるが、教職課程センター主催事業であることに鑑み、以下の２点に絞って指摘しておきたい。第一に、「学力テスト結果による成果主義」の問題性である。学力に追われるドリームフィールズ校の教師は、厳格指導に神経と身体をすり減らし、過密労働に至っている。その結果、原著によれば、調査に協力してくれた教師の約半数が、その後４年以内に退職しているという（原著第８章）。また、教育の成果を学力テスト結果だけに見出す発想は、教育を語る言葉の狭隘化をもたらし、学校の営みをすべてそこに収斂させる効果を持っていた。こうした状況は、教師の働く場としての学校の魅力を高めるものではなく、教師のリクルートという点でサステイナブルではない。日本でも教員志望者の減少が問題となっているが、成果主義の問題性の認識抜きにその対策はなしえない。

第二に、教師の社会認識の向上が重要である。ドリームフィールズ校では、白人と黒人へのダブル・スタンダードのように、教師が、社会に行き渡った差別に無自覚で、差別を再生産してしまっていた。これは構造的問題である。クルツ博士によれば英国では、今では教員養成基準から人種問題が消滅させられており、差別の存在やそのメカニズムに対する教師たちの無自覚・無関心は強まっているという（Lander, 2015: 34）。日本でも外国籍の児童生徒の増加の中で、ともすれば「〇〇人の子は怠惰だ」「〇〇人の親はわがままだ」といったステレオタイプを教師が反復してしまっている例もあろう。人種に限らず、社会の多様性が高まる昨今である。社会問題に対する高い感度と深い認識を持った教師教育制度を構築することは、ますます重要になってくるだろう。

Perraudin, P.(2018) Secondary school bans talking in the corridors to keep children calm’, *Guardian*, 22 October 2018

Willis, P. (1981) Learning to Labour, NC: Colombia University Press 〔熊沢誠ら訳『ハマータウンの野郎ども（ちくま学芸文庫）』筑摩書房、1996 年〕

Department for Education (2019) Schools, pupils and their characteristics: January 2019.

Lander, V. (2015) ‘Racism, It’s Part of My Everyday Life’: Black and Minority Ethnic Pupils’ Experiences in a Predominantly White School. In C. Alexander, D. Weekes-Bernard and J. Arday (eds), *The Runnymede School Report: Race, Education and Inequality in Contemporary Britain. Lon-don: Runnymede Trust*, pp. 32-5.

仲田康一(2016)「英国アカデミー政策と教育ガバナンス」『季刊教育法』(191)pp.100-109

付記：クルツ博士の講演の開催、講演記録の訳出、本解説の作成は、科学研究費補助金（17K14001）による研究の成果である。